

# 活動レポート

## 事業委員会（旧北海道技術士センター）

— 宿泊見学会 —

### あの日を忘れない！ 蘇る夢の島！！ 奥尻島を見学して

#### 1. はじめに

事業委員会では、北海道南西沖地震（1993年（平成5年））で、甚大な被害を受けた奥尻島の災害復旧状況を以下の要領で見学しました。奥尻島では、奥尻町役場の長崎武巳氏に案内して頂きました。実際に被災し、災害復旧を経験した方ならではの体験談を交えた貴重な話でした。本稿では、見学会の主要な見学内容について報告します。

・日時：7月20日（金）～7月21日（土）

・見学先

〈第1日目〉

災害初動時の被害情報（車内講義）→観音山の  
大崩落箇所→あわび種苗育成センター

〈第2日目〉

徳洋記念緑地公園→奥尻島津波館→青苗漁港  
人口地盤→初松前防潮堤→なべつる岩

・参加者数：28名

#### 2. 見学内容

##### (1) 災害初動時の被害情報

奥尻島へ向かう車中で天見技術士（株ドーコン）から「災害初動時における被害情報の共有」に関する講義がありました。災害時の情報共有は、壁新聞やホワイトボードが活用されていること、カーナビを使用した新しい道路情報の取り組みについて理解することができました。

##### (2) 観音山の崩落箇所

奥尻島に到着し、一番先に目にとまる大壁絵です（写真-1参照）。ここは、奥尻港裏に位置し、最大の斜面崩壊による被災があった箇所です。犠牲となった29名の方々の死亡原因は、ほとんどが土砂の下敷きによる圧死だったそうです。一部に土砂の下敷きになった後、津波に襲われ溺死した方もいたようです。ところが、津波によって、埋められていた土砂が流され、助かった方もいたとのこと。

##### (3) あわび種苗センター

第1日目最後の見学箇所です。孵化したあわびは、



写真-1 復旧後の観音山の斜面

ここで2年間ほどかけて55mm程度の大きさになるまで中間育成されます（写真-2参照）。その後、漁師に引き渡され、奥尻島近海で1～2年ほど養殖され、出荷されるそうです。



写真-2 引渡し寸前のあわび

##### (4) 徳洋記念緑地公園

第2日目最初の見学箇所です。ここは、低地都市街地だったことから87名が犠牲となった青苗地区の跡地です。現在は、公園として生まれ変わり、慰霊碑「時空翔」が建立されています（グラビア参照）。

慰霊碑の向かい側に灯台に登る坂道があります（写真-3参照）。この坂道は、地元では「運命の分かれ道」と言われているそうです。この坂道付近は、

地震直後、高台に避難しようとする方々で混雑したそうです。徒歩で避難した方は、無事高台に着きましたが、自動車で避難した方は、道路渋滞で高台に上がることが出来ず、津波にさらわれたそうです。徒歩と自動車とで運命が変わった。このことが、「運命の分かれ道」と言われる由縁だそうです。



写真-3 運命の分かれ道

#### (5) 奥尻島津波館

徳洋記念緑地公園内に、大災害の記録を後世に語り継ぐ施設として建設されています。館内には、奥尻島の起源から、災害復旧後の現在までを時系列に写真やオブジェが展示してあります（写真-4参照）。写真-4の左後ろに撮影されている小さな窓は、被災によってなくなった198名と同じ数の198個あります。



写真-4 館内の様子

#### (6) 青苗漁港人工地盤

津波発生時の迅速な避難誘導を図る目的で建設されたそうです（写真-5参照）。人工地盤の高さは、実際に津波のあった自然地盤から11.7m程度です。高台への高架道路が接続されており、短時間での避難が可能となっています。



写真-5 人工地盤から見下ろす漁港

#### (7) 初松前防潮堤

島内の各箇所を設置されている防潮堤のひとつです（写真-6参照）。人家のあるところのみに設置されているそうです。観光の島である奥尻島にとって、道路から海が見えなくなることや、漁師が朝自宅から海が見えなくなることよりも、島民は防潮堤設置を決断しました。このことから、島民にとって津波がいかに悲惨な経験だったかということ容易に想像することができました。



写真-6 民家前の防潮堤

### 3. おわりに

最近、国や自治体の財政事情が厳しいことから、「すべてを守るのではなく、効率的な予算配分をすべきである。」と良く耳にします。今回の見学会では、ひとたび被災した際の悲惨な状況を知ることができました。参加者一同にとっては、改めて防災のあり方を考える好機会になりました。

最後になりますが、現地で案内をして頂きました奥尻町総務課 長崎氏にこの場をかりてお礼申し上げます。

(文責：鈴木 智之)